

2026/1/4「恵みと慈しみ」詩編23

交読文・イザヤ60:1-3 さ354 せ589 (627)

あけましておめでとうございます。今年1年に神様の豊かな祝福がありますように。

「午年」ですが、今年の教会の標語は「羊」にまつわる喜びのメッセージをお届けします。

追いかけてくる恵みと慈しみ

神様の不思議な導きを、時折強く感じるがあります。詩編23編は、昨年最後の礼拝で、CS教案誌の日課に選ばれた箇所でした。昨年9月のひばりさんの暗唱聖句も、23編1節でした。そして同じ月に、織田志のぶ姉が天に召され、織田義郎兄直筆の詩編23編が紹介されたのです。ご葬儀の後、駆けつけた九州アシュラムでは「ハレルヤ」という主は羊飼いであるという賛美が響き、帰ってきた16日の早天のアパ・ルームの箇所が、やはり、この23編でした。

イザヤ41章や、詩編80編、ルカ12:32など、他にも心に響く、候補がたくさんあったのですが、神様が力強く示してくださっているのは、恵みと慈しみが、いつも私を追う。という、信仰であると示されました。このスピリットは「たとえ私が愚かであっても、神さまが私を見捨てず、連れ戻してくださる」という信頼です。そして「あらゆる混乱があっても、最終的には、良いことを起こしてくださる」という希望です。

かつて父が、この恵みと慈しみを、ヘブライ語のトーブ(最善/恵み)とヘセド(愛/慈しみ)という名前の、二匹の牧羊犬に例えて、説教していたことを思い出します。この二匹が、いつも私を追いかけてきてくれる、幸いな人生のイメージを教えてくださいました。365日、私たちには、この羊飼いである主の忠犬、トーブとヘセドが一緒です。子どもたちでも暗唱できる、主の祈りに次いで有名な「詩篇の中の詩編」を、ぜひ皆さんも暗唱しましょう。

喜びと祝福を後ろに残す存在

先週も紹介した、ベストセラー『羊飼いが見た詩篇23篇』（フィリップ・ケラー）も、一読をお勧めします。羊という動物の性質と、羊飼という職業が、いかに苦労が多いかということが、実体験をもとに具体的に記されています。

羊は、誤った管理の元では、最も破壊的な家畜となりうるそうです。つまり、大食漢で牧草を食い尽くしてしまうのが羊という生き物だと書いてありました。しかし一方で、羊の堆肥は植物にとって大変有益で、羊毛も取れるし、いざとなれば食肉にもなり、正しく管理されれば「金のひづめ」と呼ばれる富と益をもたらすということでした。

あふれる恵みと慈しみを浴びた者として、それを分かち合う方法を考えるようになるのが、私たち人間である、とも語られています。「良い人々は彼らの後で生きる」（テニスン）のです。私が後ろに残すのは祝福でしょうか、呪いでしょうか。私の生涯は人々にとって喜びでしょうか、痛みでしょうか。羊が、破壊と富を、どちらも生み出せるように、私たちも、ギブアンドテイクの選択によって、その後に残していくものが変わっていきます。

最も身近な、早天祈祷会に出席する兄弟姉妹から、人生で一度しか会わないような、九州アシュラムの兄弟姉妹まで、人生が始まったばかりの、幼稚園児たちから、人生の旅路を終えて、天国の門をくぐった大先輩にまで、詩編23編は、いつも私たちと共にあります。

でも、この「あたりまえ」を知らない人々が世界中に多くいます。私たちは、その死の影の地に住む人々のために、祝福と喜びを、残してゆく、そんな一年を歩みましょう。